The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	須藤訓任教授　功績調書
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2021, 52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85556
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

須藤訓任教授　功績調書

須藤訓任教授は、1978 年 3 月に京都大学文学部哲学科を卒業し、同年 4 月に京都大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程に進学し、1980 年 3 月に修了後、同年 4 月に京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程に進学し、1983 年 3 月に同課程を単位取得の上、研究指導認定退学した。その後、大谷大学文学部で非常勤講師として勤務した後、1984 年 4 月に大谷大学文学部講師に着任した。1990 年 4 月に大谷大学文学部助教授に昇任し、また、1999 年 4 月に大谷大学教授に昇任した。そして、2004 年 9 月末に大谷大学を退職し、同年 10 月 1 日付けで大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻教授に着任した。その後、本学在職中の 2012 年 11 月には、著書『ニーチェの歴史思想：物語・発生史・系譜学』により京都大学で博士（文学）学位を取得した。また、この間 2014 年 4 月から 2016 年 3 月までの期間は、大阪大学全学教育推進機構教授を兼務し、現在に至り、2020 年 3 月 31 日限りで定年退職するものである。

同教授の主たる研究対象は、ニーチェの哲学およびフロイト等、関連する近・現代西洋の哲学思想であり、近代世界において生に意味は可能かという問題を、ニーチェ他の哲学的言説の特質や機能と絡み合わせつつ、生と思想とが交錯する地点に焦点を定めながら考察することを中心とし、哲学から精神分析、倫理学までの関連領域に及ぶ。その高い研究水準は、博士課程在学中に発表した論文「ニヒリズムの自己超克―意味の（無）意味性の顕現として」（『理想』第 583 号, 1981 年）において早くも示されている。本論文は、神を失った人間はいかにして世界と生の意味を回復しうるかというヨーロッパ形而上学史の根本問題を独自の視角から論じたものであり、当時、学界の注目を集めた。その後も同教授は継続的に学術論文を刊行し、当該分野での代表的・指導的研究者として内外の学界で認められている。特に学位論文となった著書『ニーチェの歴史思想：物語・発生史・系譜学』は、ニーチェの若き日に刊行した問題作『悲劇の誕生』から最晩年の『道徳の系譜学』や『ヴァーグナーの場合』まで、ニーチェの全著作を膨大な遺稿群も含めて隅々まで踏破し、ニーチェ思想のたどり着いた「偶然としての歴史」の方法論と射程の全貌を、大胆な理論構成と緻密なテクスト読解によって描きつくす力作であり、高い評価を受けている（大阪大学出版会 2011 年）。さらに最近はハイデガーも研究対象に加え、全 560 頁に及ぶハイデガー『存在と時間』第 2 篇の評釈を上梓したところである（岩波書店 2020 年）。また、独・仏・英語に堪能な同教授は、ドイツ語圏のみならずフランス語圏におけるニーチェ研究についても造詣が深く、ジャン・グラニエ著『ニーチェ』を翻訳し我が国に紹介している（白水社文庫クセジュ 1995 年）。さらに、フロイトに関して、岩波書店から発刊された『フロイト全集』については、第 12 巻「1912-13 年：トーテムとタブー」（共訳）、第 14 巻「1914-15 年：症例・狼男・メタサイコロジー諸篇」（共訳）、第 15 巻「1915-17 年：精神分析入門講義」（共訳）、第 17 巻「1919-22 年：不気味なもの・快原理の彼岸・集団心理学」（共訳）の責任編集と翻訳ならびに総説・解説を担当し、同全集の刊行に大きく貢献した。また同教授の近現代思想への関心はヨーロッパの哲学思想にとどまらず、アメリカにも及び、リチャード・ローティ著『リベラル・ユートピアという希望』の翻訳を上梓している（共訳、岩波書店 2002 年）。

本学での教育面においても、須藤教授は、主査・副査として多くの博士学位論文を審査し、文学研究科・文学部における研究者養成に尽力すると同時に、全学共通教育にも注力し、哲学基礎講義を毎年担当するのみならず、新入生向けゼミナールである「学問への扉」を、その企画・開講当初から担当するなど、基礎教育及び教養教育の充実のために貢献した。

本学の管理運営業務についても本学着任以降、本研究科において、教育支援室員を 8 年に亘って務め、その間、教務部門チーフ、就職支援部門チーフ、副室長を担当し、またその後、国際連携室員を務め、EM 部門チーフを、現在は研究推進室員を務め、図書部門チーフを、それぞれ担当している。国際連携室で EM 部門チーフを担当した際には、エラスムス・ムンドス（EM）ユーロカルチャープログラム・マネージメント委員会に出席するため海外出張して現地で国際会議に参加するなど、同プログラムの運営のために貢献した。

他方、学外では、日本哲学会、関西哲学会、関西倫理学会等で長年に亘り役員を務めるなど、これらの学会の発展に貢献した。

以上のように、須藤訓任教授は、高い水準のニーチェ及びその関連領域にある哲学思想研究の成果を学術論文及び著書として公表するのみならず、翻訳書の公刊、学生・後進の教育研究指導、本学における管理運営業務、学会の発展への寄与等、諸方面において多大の貢献を果たしたものである。ここに、大学院文学研究科教授会はその功績をたたえ、本学名誉教授候補者として推薦するものである。